

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2022 年度
氏名	橋本 佳奈	指導教員 (主査)	高橋 稔

論文題目	曖昧な場面における解釈バイアスと自己意識保有傾向が身体醜形懸念に与える影響
------	---------------------------------------

本文概要

【問題と目的】 身体醜形障害 (Body Dysmorphic Disorder : BDD) の症状として知られる身体醜形懸念は、容姿についての欠陥への過剰な心配や強いとらわれ、過度の確認行動や容姿についての欠陥をカムフラージュするための行動、社会的場面からの回避や安全確保行動と定義され、非臨床群にもみられることが指摘されている (Littleton et al., 2005)。これまで、容姿や体型に関連する精神疾患の個人内心理要因として、自己意識が取り上げられている。特に BDD 患者の公的自己意識は、一般大学生と比べて著しく高いことが明らかにされており (鍋田他, 1986)、BDD 各個人特有の心理的要因として指摘されてきた。しかし、自己意識への直接的介入は難しく、介入可能な変数を含めた研究を進める必要がある。近年になり、BDD 患者には、曖昧な社会的情報に対して否定的な解釈バイアスを示す傾向があることが報告されている (Buhlmann et al., 2002)。解釈バイアスは、否定的とも肯定的とも解釈できる曖昧な対人場面について否定的に偏って解釈してしまうというものであり、社交不安障害 (Social Anxiety Disorder : SAD) の発生・維持要因としても注目されている。この否定的解釈は、「自分が他者から否定的に評価されている」という誤った考えを強め (Stopa & Clark, 1993)、その結果として、社会的場面を回避するようになる (伊藤他, 2015)。BDD 患者には、他者が自分の欠陥に対して注意を向け、自分が馬鹿にされていると考えている場合が多い (Phillips, 1996 松尾訳 1999)。また、公的自己意識の高い個人は、他者の行動を解釈する際に自己に関連付けやすく妄想的な認知が生じやすくなる (Fenigstein & Vanable, 1992) という指摘もある。これらを踏まえると、身体醜形懸念を有する者にも解釈バイアスが生じていることが十分考えられ、身体醜形懸念の発生・維持要因となっている可能性がある。そこで本研究では、BDD 好発期である青年期の男女大学生を対象に、自己意識保有傾向および曖昧な場面における肯定的・中性的・否定的解釈が身体醜形懸念に与える影響について検討することを目的とした。

【方法】 無記名式のアンケート調査を Web 上で実施し、大学生 209 名を分析対象者とした。調査内容は、①基本属性 (年齢, 性別) ②日本語版 Body Image Concern Inventory (田中・有村・田山, 2011) ③自己意識尺度 (菅原, 1984) ④自己注目場面想定法質問紙 (守谷・佐々木・丹野, 2007) を一部修正⑤曖昧な容姿に関する場面の解釈 (独自に作成) であった。

【結果】 自己意識および曖昧な場面の解釈が身体醜形懸念に与える影響をみるため、階層的重回帰分析を各場面 (対人場面, 非対人場面, 容姿に関する場面) ごとに実施した。身体醜形懸念を従属変数とし、Step1 に公的自己意識, 私的自己意識を投入, Step2 では場面に対する各解釈 (肯定的解釈, 中性的解釈, 否定的解釈) を投入, Step3 では、自己意識と各解釈を掛け合わせた交互作用項を投入した。その結果、Step1 における決定係数は有意であり ($R^2=.38, p<.01$)、公的自己意識が身体醜形懸念に影響を及ぼすことが示された ($\beta=.58, p<.01$)。対人場面の解釈を投入した結果、Step2 において決定係数に有意な増分がみられ ($\Delta R^2=.04, p<.01$)、対人場面の否定的解釈が影響を与えることが示された ($\beta=.23, p<.01$)。Step3 には有意な増分は得られなかった。非対人場面の解釈を投入した結果、Step2, Step3 いずれにおいても決定係数に有意な増分は得られなかった。容姿に関する場面の解釈を投入した結果、Step2 において決定係数に有意な増分がみられ ($\Delta R^2=.09, p<.01$)、容姿に関する場面の否定的解釈が身体醜形懸念に正の影響を与えていることが示された ($\beta=.32, p<.01$)。Step3 には有意な増分は得られなかったが、容姿に関する場面の中性的解釈が有意な負の影響を与えることが示された ($\beta=-.13, p<.05$)。

【考察】本研究の結果から、公的自己意識が身体醜形懸念に影響を与えていることが示された一方で、私的自己意識は影響を与えていなかった。このことから、他者との関係性での自己に意識を向けていることが身体醜形懸念を高めている可能性が示唆された。加えて、本研究では、対人場面および容姿に関する場面における否定的な解釈が身体醜形懸念に影響を及ぼしているのに対し、非対人場面での解釈は影響を与えていないことが、明らかになった。解釈バイアスは、状況特異的なものであることが指摘されているが、本研究結果からも解釈バイアスの場面特有性が示されていた。つまり、身体醜形懸念が高い人は、他者がいる場面で、他者から否定的な評価を受けるのではないかと否定的に状況を解釈しやすいことが明らかにされた。また、容姿に関する場面における中性的な解釈が、身体醜形懸念に負の影響を与えることが示された。このことから、容姿に関する場面で中性的な解釈ができないことが、ますます身体醜形懸念を強めていると考えられる。身体醜形懸念研究においては、解釈バイアスが一定の影響を与えていた点は新たな知見である。これまで解釈バイアスは SAD 研究の中で実証されてきたが、本研究結果から、新たに身体醜形懸念に対する解釈バイアスの影響が明らかになった。本研究結果を踏まえ、解釈バイアスの影響が示唆されたことにより、身体醜形懸念の変容を促す介入可能なターゲットとなる可能性が期待される。